

俳句の題材（I）

山口青邨

俳句の材料としてどんなものがあるか、俳句に何を詠むか——。俳句には季節といふものがある、櫻の花、鶯、晝寝、藤の花、こほろぎ、雪、枯木——みな季節の感じを強くもった代表的なものである。俳句には季節を必ず入れなければならぬ、そして季節がそのまま材料として使はれる、これは當然のことである。然し季節だけが俳句の題材ではない、天地にあるもの、自然界と言はず、人間の世界と言はず、何でも材料になる。

本でも、机でも、電燈でも、火鉢でも、マッチでも、洋傘でも、帽子でも、洋服でも、大根でも、蕪でも、卵でも、キャベツでも、馬鈴薯でも、コーヒーポットでもなんでもよい。又、一步庭に出れば、チューリップでも、クロッカスでも、水仙でも、菊でも、コスモスでも、梅の實でも、櫻ん坊でも何でもよい。街に出れば、電車でも、汽車でも、バスでも、停留所でも、ストリートガールでも、ネオンサインでも、映畫でも、パチンコでも何でもよい。その他野球でも、音樂でも、釣でも、水泳でもよい。旅行でも、仕事でも、病氣でもかまはない。

正月、雛祭、端午の節句、七夕、その他月々の行事、何でもよい。星でも、月でも、雲でも、雨でも、雪でも、雷でも、風でもよい。海でも、山でも、川でも、池でも、沼でもよい。そこに住む蛙でも、鱒でも、鯨でも、金魚でも、鮒でも、蛭でも、蛙でも、そして雀でも鳥でもよい。

さういふ材料を使って、自分の詩情を傾けるのである。自分を通して、自分の魂を入れて、表現するのである。一枚の蘆の葉、一片の花びら、それは單純である、然しよく見れば無限の感情がある、その描寫に、その表現に、私達は苦心をするのである。

一匹の動物、一つの器物となれば、一片の花びら、一枚の葉よりは複雑である。然し描寫の心には變りはない。一つの風景、一人の人間の姿、感情ともなると、もっと複雑になる、そうなってもこれを描寫し表現する私達の態度には變りはない。誠心誠意、熱情をもって把握し、描寫する、ここに藝術の眞諦がある。單純なものでも、複雑に表現することもあるし、複雑なものでも單純化して描寫することもある。

象徴といふことがあるが、短詩形ではさういふことによらなければ複雑なもの表現出来ない。私達はよく「如く」といふ言葉によって、あるものを表現することがある。あるものを表はすのに他のものによる連想の力を借りて表はすのである、卑怯のやうだが、短詩では止むを得ない。

對象に對つた時、作者はいかにこれを見、いかに把握し、いかに感じ、いかに表現するか、——これによって作品が定まるのである、作品の面白さも、よさも、新しさも、それによって定まるのである。